

鐵路が変えた日本

暮らしに文化、プロ野球まで——鉄道開業150年

読売新聞社

読売新聞
アーカイブ選書

The Yomiuri Shimbun

読売新聞アーカイブ選書

鐵路が変えた日本

暮らしに文化、プロ野球まで——鉄道開業150年

読売新聞社刊

はじめに

日本の鉄道は2022年10月14日で開業150年を迎えた。1872年（明治5年）10月に東京・新橋―横浜間を蒸気機関車が走り始めて以来、鉄道は、私たちの日々の暮らしや文化、産業、さらには感覚さえも変えていった。その変容の様子から鉄道の置かれた現状までを、読売新聞の東京本社社会部、文化部、生活部、運動部、大阪本社文化部、運動部の各部が多角的に取材した。

第1章 軌跡をたどって

- (1) 暮らし一変 速度革命／(2) 利用客も「分刻み」／(3) 難所攻略 先人の知恵／
- (4) 貨物輸送 物流変えた／(5) リニア 夢の超特急

第2章 それぞれの選択

- (1) 「攻めの廃線」バスを充実／(2) バス会社が3セク運行／(3) 新幹線開業 在来線に影

第3章 文化を運ぶ

- (1) 文明開化 民衆の夢乗せて／(2) 初詣始まり 温泉は行楽地に／(3) 東京駅 近代国家への意気／(4) 歌劇、野球、百貨店……私鉄型郊外開発／(5) 美術・工芸 海外誘客に一役／(6) 原爆、終戦……走り続けた

第4章 文化を結ぶ

- (1) 戦後復興 渾沌と希望／(2) 地方で自分発見 大ブームに／(3) 乗る時間・車両こそ売り／〈特別対談〉今いる場からどこにでも——老川慶喜さん×梯久美子さん

第5章 ローカル線に魅入られ

- (1) 〈JR備後落合駅〉山の駅舎 元機関士のおもてなし／(2) 〈くま川鉄道〉豪雨復旧 支えは乗客の声／(3) 〈JR只見線〉異例「全線再開」……願い、支えた11年／(4) 〈阿佐海岸鉄道〉線路も道路もこれ1台／(5) 〈銚子電鉄〉自虐の副業 売り上げ食品8割

第6章 野球伝来150年——鉄道と共に

- (1) 技師が投じた初カーブ／(2) 球団 沿線開発の目玉／(3) 新幹線 優勝運ぶ

この電子書籍は、日本の「鉄道150年」にちなんだ読売新聞の連載記事を再録したものです。掲載日は各章のとびらに記載しています。文中の肩書、年齢、その他の情報は、掲載当時のままです。

第1章 軌跡をたどって

文明開化で持ち込まれた西洋の新技术である鉄道は、現代の社会へとつながる重要な変化をもたらした。150年の節目に、その軌跡をたどる。(2022年8月16〜20日、夕刊掲載)

〈第1回〉

暮らし一変 速度革命

東京〜横浜53分 行楽ぐつと身近に

JR新橋駅から少し東に歩くと、東京・汐留のビルの谷間に小さな洋風の建物がある。2003年に復元された旧新橋停車場。日本初の鉄道の出発地点だ。

そこから現在の横浜・桜木町駅まで約29キロ。ほぼ今のJRと同じルートを蒸気機関車で53分で結んだ。

「初めて鉄道に乗った人たちの驚きは想像もつかない。その時代に体験してみたかったですね」。8月半ば、旧停車場の見学に訪れた千葉県船橋市の会社員、熊倉紀明さん（48）は、思いを巡らせていた。

想像を助けてくれる絵図がある。東京都港区立郷土歴史館の明治初期の錦絵「東京品川海辺蒸気車鉄道之真景」だ。蒸気機関車を背景に、徒歩や人力車、馬車などで行き交う当時の人々の姿が描かれている。

それまでの最も一般的な移動手段は徒歩だったが、横浜から東京までは約10時間。所用をこなすには1泊2日が必要だった。それが、鉄道で「日帰り」が可能になった。なにより、座っているだけなので疲れない。

料金は「上等」「中等」「下等」の3種で、最も安い下等でも37銭5厘。白米10キロ分の価格で、まだ手頃とは言えないが、人々の距離と空間の感覚を劇的に変えたのは間違いない。

東京は横浜の人にとって、芝居を見に行ったり、買い物に行ったりする生活圏になってゆく。開業翌年の「新聞雑誌」（日新堂）は、横浜の女性が子供を寝かしつけて品川に行き、用事を終えて帰ったら、まだ寝ていたというエピソードを、驚きをもって紹介している。

◇

鉄道は、行動半径を広げ、行楽を身近にもした。

それが駅の名前にうかがえるのが、東京都小平市の西武新宿線「花小金井」駅だ。1927年開業で、駅名の「花」は最寄りの桜の名所・玉川上水堤にちなむ。郊外への行楽の足として鉄道は欠かせなくなった。

「旅」のあり方も変化した。それまでは峠を越え、川を渡るといった道中の労苦を伴うものだったが、鉄道は運賃さえ払えば目的地に行ける。日本国際観光学会の崎本武志会長（江戸川大教授）は「目的地を純粹に楽しむ今の『旅』のかたちが、鉄道によって定着した」と語る。

首都圏と箱根を結ぶ小田急電鉄の小田原線（新宿―小田原）は、そうした旅のかたちを体現するものだ。

1927年の開業時から観光を主目的とし、箱根をケーブルカーや登山鉄道で周遊できるセット乗車券を販売。35年には、当時としては珍しいノンストップで目的地を結ぶ「週末温泉特急」を走らせ、今の特急ロマンスカーへとつながる。



先端技術の常ではあるが、便利さと引き換えに、失われたものを嘆く声もあった。辛辣しんらつだったのは鉄道発祥の地・英国の思想家ジョン・ラスキン（1819～1900年）で、「鉄道は人間を旅人から生きた小荷物に変える」と評している。

ただ、鉄道がもたらした新たな旅の魅力もある。「車窓」からのパノラマだ。

*この続きは製品版でお楽しみください。

読売新聞アーカイブ選書

鉄路が変えた日本

暮らしに文化、プロ野球まで——鉄道開業150年

発行日 2022年12月25日

著者 読売新聞社

発行者 山口寿一

発行所 読売新聞東京本社

〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1

URL: <https://www.yomiuri.co.jp/>

© 2022 The Yomiuri Shimbun

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、インターネット上に掲載すること、および有償、無償に関わらず、データを第三者に譲渡することを禁じます。なお個人利用の目的であっても、コピーガードを解除しての複製は、法律で禁じられています。